

## ■ 道内6番目 戦後創設第1号 市立図書館を寄贈した 名塩 良造翁

全国でも有数の菓子総合商社として名高い「おかしのナシオ」の創業者で、道内6番目戦后市立図書館第1号を寄贈し、教育に心血を注いだ経済人で、俳句を嗜み俳号を呑空といい、野付牛時代に井上傳蔵とも俳句を親しみあった可能性もある、北見市にとっては、教育史に残る人物です。



名塩良造は、明治16年(1883)3月1日 大阪市船場淡路町で名塩紙専門荷受け問屋を経営する父幸三郎、母作の次男として生まれ、昭和42年(1967)7月26日享年85歳で他界しています。良造が生まれて数年後に紙相場で破産し、家族は京都に引越し貧困の生活を送っていました。そのため、良造は小学校1年生で退学し、古着質屋に丁稚奉公に出ています。向学心と知識欲に燃えていた良造は、商品をくるむ新聞や雑誌を膝の上に置き、指先で字画をなぞりながら読み書きを覚え、自らの頭の中で考える力を鍛えていったのです。良造28歳の時、ハッカと木材の景気に湧く野付牛にきました。

その間、青年期には復興した父の会社、金沢支店長時代に「自分で商売をしなければ本物の商いは出来ない。」と父に嘆願し、単身白樺太に渡り雑貨屋を始めますが、土地の事情を把握していないため失敗し、釧路に渡り魚の加工場で働きながら、次なる商売の資金として、月給5円の内4円を蓄えたそうです。

野付牛で始めたのは、菓子、塩干物、果物、荒物などの食料品と雑貨の行商から初め、飯場や開拓農家の集落に売り歩き、商売熱心・旺盛なサービス精神が顧客拡大に繋がって売上も順調に伸びていきました。ある冬の吹雪の夜、疲れと凍てつく寒さに耐えられなくなった良造は、とある運送店の荷置き場のワラに包まって寝込んでしまいます。しばらくして、「こんなところに寝ていたら風邪を引きますよ。家に床を敷きますから、どうぞ、そちらでお休みください。」との女性の声に呼び覚まされます。布団の温かさに勝る人の温かさに触れ、良造は床の中で感涙しました。この運送店が、後の名塩商店入出荷のすべてを委ねる「上村運送店」です。良造は、留辺蘂橋のたもとに10坪ほどの店を構えた時、京都の父へ開店の知らせをします。その時父は「鯨は川には住まずと言うだろう。こんな所で満足しているなら、おまえは小さな魚でしかない。」と言われ、後の俳句に『お叱りや鯨は川に住むまじと』と残しています。商売の信用を得るために大正2年(1913)に根室銀行(後の安田銀行)が開設されると、騎馬で乗りつけ口座第1号を設けています。

また、良造の儉約ぶりは有名で会社はもちろんですが、家庭では「魚はアラしか買わず、チリ紙一枚も無駄にせず、消費の極少化を投資にまわす」ほどでした。

良造は「親苦勞、子樂、孫乞食」といい、親が苦勞して財産を築いても、子に樂をさせ散財一方となると、孫は乞食同然になると言い聞かせています。